

41797

教科書文庫

4
810
41-1944
20000 81683

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

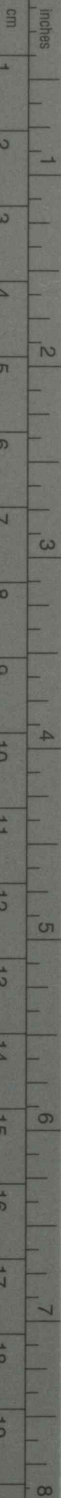


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
4179

中等國文 四

文部省

(11)



中等國文

四

文部省



42  
810  
昭19

目 録

一	軛の音	四
二	大國主神	七
三	人臣の道	九
四	菊池一族	十四
五	月天心	二十八
六	樹氷の世界	三十
七	たざりたつた時代の人	三十五
八	長柄堤	五十九
九	松陰と家庭	七十一
十	高名の木のほり	七十六
十一	道	八十一

一 鞆の音

萬葉集

和銅元年戊申天皇の御製の歌

ますらをの鞆の音すなりものゝふのおほまへつぎみ  
楯立つらしも

天皇酒を節度使の卿等に賜へる御歌

ますらをの行くとふ道ぞおほろかにおもひて行くな  
ますらをのとも

藤原宇合卿の西海道節度使に遣さるゝ時高橋連蟲

麻呂の作れる歌

千萬のいくさなりとも言擧げせず取りて來ぬべきを

のことぞおもふ

佐婆の海中忽ち逆風漲浪に遇ひ漂流經宿して後幸

ひに順風を得豊前國下毛郡分間の浦に到着すこ

こに艱難を追ひ怛み悽惻して作れる歌 雪宅麻呂

大君のみことかしくみ大船の行きのまにくやどり  
するかも

長忌寸意吉麻呂詔に應ふる歌

大宮の内まで聞ゆ網引きすと網子とゝのふる海人の  
呼び聲

葛井連諸會詔に應ふる歌

新たしき年のはじめに豊の年しるすとならし雪の降  
れるは

高市連黒人の羈旅の歌

櫻田へ鶴鳴きわたる年魚市潟潮干にけらし鶴鳴きわたる

志貴皇子のよろこびの御歌

石ばしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春になり  
にけるかも

山部宿禰赤人の作れる歌

み吉野の象山の際の木末にはこゝだもさわぐ鳥の聲  
かも

雲を詠める

柿本朝臣人麻呂の歌集に出づ

あしひきの山河の瀬の響るなべに弓月が嶽に雲立ち  
わたる

二 大國主神

古事記

大國主神またの名は大穴牟遲神とまをし、またの名は葦原色許  
男神とまをし、またの名は八千矛神とまをし、またの名は宇都志國  
玉神とまをす。あはせて名五つあり。

この大國主神の兄弟八十神ましき。その八十神共に因幡に行  
きける時に、大穴牟遲神に袋を負せ、從者として率て行きき。

こゝに氣多の崎に到りける時に裸なる兔伏せり。八十神その  
兔に言ひけらく、「汝せむは、この潮を浴み、風の吹くに當りて、高山の  
尾上に伏してよ。」と言ふ。かれ、その兔、八十神の教ふるまゝにして  
伏しき。こゝにその潮の乾くまに、その身の皮ごとく、風に  
吹き裂かえしからに、痛みて泣き伏せれば、最後に來ませる大穴

牟遲神、その兎を見て、「なぞも、汝泣き伏せる。」と問ひたまふに、兎まをさく、「僕、隱岐の島に在りて、この國に渡らまくほりつれども、渡らむよしなかりしゆゑに、海のわにを欺きて、言ひけらく、「吾と汝と族の多き少きを競べてむ。かれ、汝はその族のありのことと」率て來て、この島より氣多の崎まで皆なみ伏し渡れ。吾、その上を踏みて走りつゝ、讀み渡らむ。こゝに吾が族といづれ多きといふことを知らむ。」かく言ひしかば、欺かえてなみ伏せりし時に、吾、その上を踏みて讀み渡り來て、今、地に下りむとする時に、吾、「汝は我に欺かえつ。」と言ひをはれば、即ち最端に伏せるわに、我を捕らへて、ことごとくに我が衣服を剥ぎき。これに因りて、泣き憂ひしかば、先だちていでませる八十神の命もちて、「潮を浴みて、風に當り伏せれ。」と教へたまひき。かれ、教へのごとせしかば、我が身ことごとくに傷はえつ。」と

まをす。

こゝに大穴牟遲神、その兎に教へたまはく、「今とくこの水門に行きて、水もて汝が身を洗ひて、即ちその水門の蒲黃を取りて、敷き散らして、その上にこいまろびてば、汝が身もとの膚のごと、必ず癒えなむものぞ。」と教へたまひき。かれ、教へのごとせしかば、その身もとのごとくになりき。これ、因幡の白兎といふものなり。今に兎神となもいふ。

### 三 人臣の道

神皇正統記

凡そ皇土にはらまれて、忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども、後の人を勵まし、その跡をあはれみて賞せらるゝは、君の御政なり。下として、

競ひ争ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして過分の望みを致すこと、みづからあやぶむる端なれど、前車の轍を見ることがはまことにありがたき習ひなりけむかし。

中古までも人のさのみ豪強なるをば誠められき。豪強になりぬれば必ず驕る心あり。果して身を滅し家を失ふためしあれば、誠めらるゝも理なり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することを止むべしといふ制符たびゝありき。源平久しく武を執りて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國の兵を召し具しけるに、近代となりて、やがて肩を入るゝやから多くなりしによりて、この制符は下されき。果して、今までの亂世の基なれば、言ふかひなきことになりけり。

この頃のことわざには、一たび軍に驅け合ひ、或は家の子郎從、節

に死ぬる類ひもあれば、わが功におきては日本國を賜へ、もしは半國を賜はりても足るべからずなど申すめる。まことに、さまで思ふことはあらじなれど、やがて、これより亂るゝ端ともなり、又、朝威のかるゝし、さも推し量らるゝものなり。言語は君子の樞機なり。と言へり。あからさまにも、君をないがしろにし、人に驕ることはあるべからぬことにこそ。堅き氷は霜を履むより至る習ひなれば、亂臣賊子といふものは、その初め、心言葉を慎まざるより出て來るなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらじ、草木の色の改るにもあらじ。人の心の悪しくなり行くを末世とはいへるにや。昔、許由といふ人は、帝堯の國を傳へむとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、この水をだにきたながりて渡らず。その人の五臟六腑の變れるにはあらじ、よく

思ひならはせる故にこそあらめ。なほ行く末の人の心思ひやるこそ淺ましけれ。大方己一身は恩に誇るとも、萬人の恨みを殘すべきことをば、などか顧みざらむ。君は萬姓の主にてましませば、限りある地をもて、限りなき人に分たせ給はむことは、推しても量り奉るべし。もし、一國づつを望まば、六十六人にて皆塞がりなむ。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は喜ぶとも、千萬の人は喜ばじ。況んや、日本の半ばを志し、皆ながら望まば、御門はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、言葉にも出で、面に恥づる色のなきを謀反の始めといふべきなり。昔の將門はかゝる類ひにや侍りけむ。昔は人の心正しくて、おのづから將門に見も懲り、聞きも懲りけむ。今は人々の心かくのみなりにたれば、この世はよく衰へぬるにや。

漢の高祖の天下を取りしは蕭何、張良、韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人にすぐれたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖の師として、はかりし籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決するはこの人なり。と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひて少しきなる所を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣多く亡びしかど、張良は身をまたくしたりき。

近き代の事ぞかし、賴朝の時までも、文治の頃にや、奥の秦衡を追討せしに、みづから向かふことありしに、平重忠が先陣にてその功すぐれたりければ、五十四郡のうちにいづくをも望むべかりけるに、長岡郡とて、極めたる少しき所を望み賜はりけるとぞ。これは人々に廣く賞をも行なはしめむがためにや。賢かりけるをのここにこそ。又直實といひける者に一所を與へ給ふ下文に、日本第一



の剛の者なり」と書きて賜ひてけり。一とせかの下文を持ちて奏聞する人のありけるに、「褒美の言葉の甚だしさに、與へたる所の少さまことに名を重くして利をかるくしける、いみじきこと」と口々に褒め合へりける、いかに心得て褒めけむといとをかし。これまでの心こそなからめ、事に觸れて君を落し奉り、身を高くするともがらのみ多くなれり。ありし世の東國の風儀も變り果てぬ。公家の古き姿もなし。いかになりぬる世にかと歎き侍るともがらもありと聞えしかど、中一とせばかりは、まことに一統のしるしと覺えて、天の下舉り集りて、都のうちにはえとしく、こそ侍りけれ。

## 四 菊池一族

太平記

## 父の教訓

京都鎌倉は、既に高氏義貞の武功によつて靜謐しぬ。今は筑紫へ討手を下されて、九國の探題英時を攻めらるべしとて、二條大納言師基卿を太宰帥になされて、既に下し奉らんとせられけるところに、六月七日、菊池少貳大友が許より、早馬同時に京着して、九州の朝敵残るところなく、退治候ひぬと奏聞す。

その合戦の次第を後に詳しく尋ぬれば、主上未だ船上に御座ありし時、少貳入道妙慧大友入道具簡菊池入道寂阿三人同心して、御方に參るべき由を申し入れける間、即ち綸旨に錦の御旗を添へてぞ下されける。その企て、かれら三人が心中に秘して、未だ色に出さずといへども、さすがに隠れなかりければ、この事やがて探題英時が方へ聞えければ、英時實否をよく窺ひみんために、先づ菊池入道寂阿を博多へぞ呼びける。菊池この使に肝附いて、これは

いかさまかの隠謀露見して、われらを討たんためにぞ呼び給ふらん。さらんに於いては、人に先をせられてはかなふまじ。こなたより遮つて、博多へ寄せて、てきめん勝負を決せんと思ひければ、かねての約諾に任せて、少貳大友が方へ觸れ遣しけるところに、大友、天下の落居未だいかなるべしとも見定めざりければ、分明の返事に及ばず。少貳は又、その頃京都の合戦に、六波羅毎度勝つに乗る由聞えければ、己が咎を補はんとや思ひけん、日頃の約を變じて、菊池が使八幡彌四郎宗安を討つて、その首を探題の方へぞ出したりける。菊池入道大きに怒つて、日本一の不當人どもを頼んで、この一大事を思ひ立ちけるこそ越度なれ。よし、その人々の與せぬ軍はせられぬか。とて、元弘三年三月十三日の卯の刻に、僅かに百五十騎にて探題の館へぞ押し寄せける。

探題はかねてより用意したることなれば、大勢を城の木戸より外へ出して戦はしむるに、菊池小勢なりといへども、皆命を塵芥に比し、義を金石に類して攻め戦ひければ、防ぐ兵そくばく討たれて、詰めの城へ引き籠る。菊池勝つに乗つて、堀を越え、木戸を切り破つて、隙間もなく攻め入りける間、英時こらへかねて既に自害をせんとしけるところに、少貳大友六千餘騎にて後詰めをぞしたりける。菊池入道これを見て、嫡子肥後守武重を呼びて言ひけるは、われ今、少貳大友に出し抜かれて、戦場の死に赴くといへども、義の當るところを思ふ故に、命を落さんことを悔いず。然れば寂阿に於いては、英時が城を枕にして討死すべし。汝は急ぎわが館へ歸つて城を堅うし、兵を起して、わが生前の恨みを死後に報ぜよ。と言ひ含め、若黨五十餘騎を引き分けて、武重に相添へ、肥後國へぞ返しけ

る。故郷に留めおきし妻子どもは、出でしをつひの別れとも知らず、歸るを今やとこそ待つらめと、あはれに覺えければ、一首の歌を袖の笠符かまじるに書いて、故郷へぞ送りける。

ふるさとにこよひばかりの命とも知らずや人のわれを待つらむ

肥後守武重は、四十有餘の一人の親の、唯今討死せんとて大敵に向かふ戦なれば、「一所にてこそともかうもなり候はめ」と再三申しけれども、「汝をば天下のために留むるぞ」と、父が庭訓ていん堅ければ、武重力なくこれを最後の別れと見捨てて、泣くく肥後へ歸りける心のうちこそあはれなれ。その後、菊池入道は、二男肥後三郎と相共に、百餘騎を前後に立て、後詰めの勢には目を懸けずして、探題の屋形へ攻め入り、遂に一足も引かず、敵に刺し違へ、刺し違へ、一人も残

らず討死す。

さても少貳大友が今度のふるまひ人にあらずと、天下の人に譏られながら、そら知らずして世間のやうを聞きあたりけるところに、五月七日、兩六波羅既に攻め落されて、千早の寄せ手も悉く南都へ引き退きぬと聞えければ、少貳入道、こはいかゞすべきと仰天す。さらばわれ探題を討ち、身の咎を遁ればやと思ひければ、先づ菊池肥後守と大友入道とが許へ、内々使者を遣して相語らふに、菊池は先に懲りて耳にも聞き入れず、大友はわれも咎ある身なれば、かくてや助ると、堅く領掌してけり。

今日や明日やと吉日を選びけるところに、英時、少貳が隠謀の企てを聞きて、「事の實否を窺ひみよ」とて、長岡六郎を少貳が許へぞ遣しける。長岡、即ち行き向かつて、少貳に見參すべき由を言ひけれ

ば折節相いたはる事ありとて對面に及ばず。長岡力なく、少貳入道が子息筑後新少貳が許に行き向かひ、言ひ入れて、さりげなきさまにて、かなたこなたを見るに、唯今打ち立たんずる有様にて、楯をはがせ、鏃を研ぐ最中なり。又、遠侍を見るに、蟬本白くしたる青竹の旗竿あり。さればこそ、船上より錦の御旗を賜はつたりと聞えしが、まことなりけりと思つて、對面せばやがて刺し違へんずるものと思ひけるところに、新少貳何心もなげにて出で會ひたり。長岡座席に着くとひとしく、まさなき人々の謀反の企てかな。と言ふまゝに、腰の刀を抜いて、新少貳に飛んでかゝりけり。新少貳飽くまで心早き者なりければ、側なる將棋の盤を押し取つて、突く刀を受け止め、長岡にむざと引つ組んで、上を下へぞ返しける。やがて少貳が郎従ども、あまた走り寄つて、上なる敵を三刀刺して、下なる主を助けければ、長岡六郎本意を達せずして、忽ちに命を失ひてけり。

少貳筑後入道、さては、わが謀反の企てはや探題に知られてけり、今は止むことを得ぬところなり。とて、大友入道相共に、七千餘騎の軍兵を率して、同じき五月二十五日の午の刻に、探題英時の館へ押し寄せけり。世の末の風俗、義を重んずる者は少く、利にはしる人は多ければ、唯今まで付き従ひつる筑紫九箇國の兵どもも、恩を忘れて落ち失せ、名をも惜しまで、鬪りける間、一朝の間の戦に、英時遂に打ち負けて、忽ちに自害しければ、一族郎従三百四十人、續いて腹をぞ切つたりける。

## 筑後川の戦

正平十四年七月十九日に、菊池は先づおのが手勢五千餘騎にて

筑後川を打ち渡り、少貳が陣へ押し寄せ。少貳いかゞ思ひけん、戦はず三十餘町引き退き、大原に陣を取る。菊池續いて攻めんとしけるが、あはひに深き沼あつて、細道一つありけるを、三所掘り切つて細き橋を渡したりければ、渡るべきやうもなかりけり。兩陣僅かに隔てて、旗の紋鮮やかに見ゆるほどになれば、菊池わざと少貳を恥ぢしめんために、金銀にて月日を打つて着けたる旗の蟬本に、一紙の起請文をぞ押ししたりける。これは去年太宰少貳古浦の城にて既に一色宮内太輔に討たれんとせしを、菊池肥後守大勢を以つて後詰めをして、少貳を助けたりしかば、少貳喜びに堪へず、今より後、子孫七代に至るまで、菊池の人々に向かつて、弓を引き、矢を放つことあるべからず」と、熊野の牛王の裏に、血を絞りに書きたりし起請なれば、今情なく心變りしたるところのうたてしさを、且つうは天に訴へ、且つうは、人に知らしめんためなりけり。

八月十六日の夜半ばかりに、菊池先づ夜討に馴れたる兵を三百人すぐつて、山を越え水を渡つて、搦め手へ廻す。宗徒の兵七千餘騎をば三手に分けて、筑後川の端に沿ひて川音に紛れて、嶮岨へ廻りて押し寄せ。大手の寄せ手、今は近づかんと覺えけるほどに、搦め手の兵三百人敵の陣へ入つて、三所に鬨の聲を揚げ、十方に走り散つて、敵の陣々へ矢を射かけて、後へ廻つてぞ控へたる。分内せばき所に六萬餘騎の兵、沓の子を打ちたるやうに、役所を造り並べたれば、鬨の聲に驚き、いづれを敵と見分けたることもなく、こゝに寄り合ひ、かしこに駆け合つて、をめき叫びて追つ返しつ、同士討をするに、數刻なりしかば、少貳頼みきつたる兵三百餘人、同士討にこそ討たれけれ。

敵陣騒ぎ亂れて、夜既に明けければ、一番に菊池次郎、伴の起請の旗を進めて、千餘騎にて驅け入る。少貳が嫡子太宰新少貳忠資、五千餘騎にて戦ひけるが、父が起請や子に負ひけん、忠資忽ちに打ち負けて、引き返し引き返し戦ひけるが、敵に組まれて討たれにけり。これを見て朝井但馬將監胤信、筑後新左衛門窪能登守、肥前刑部大輔、百餘騎にて取つて返し、近づく敵に引つ組み引つ組み、刺し違へて死にければ、菊池孫次郎武明、同じき越後守賀屋兵部大輔、見參岡三河守庄美、作守、宇都宮刑部丞、國分次郎以下、宗徒の兵八十三人、一所にて皆討たれにけり。

少貳が一陣の勢は、大將の新少貳討たれて引き退きければ、菊池が前陣の兵、汗馬を伏せて控へたり。

二番に菊池が甥、肥前次郎武信、赤星掃部助武貫、千餘騎にて進めば、少貳が二男太宰越後守頼泰並びに太宰出雲守、二萬餘騎にて相向かふ。初めは百騎づつ出で會ひて戦ひけるが、後には、敵御方二萬、二千餘騎さつと入り亂れ、こゝに分れかしこに會ひ、半時ばかり戦ひけるが、組んで落つれば、おろし重なり、切つて落せば首を取る。戦未だ決せざる先に、少貳方には、赤星掃部助武貫を討つて喜び、寄せ手は引き返す。菊池が方には、太宰越後守を生け捕りて、勝鬨を揚げてぞ喜びける。この時宮方に、結城右馬頭加藤大夫判官、合田筑前入道熊谷豊後守、三栗屋十郎太宰修理亮、松田丹後守、同じき出雲守熊谷民部大輔以下、宗徒の兵三百餘人討死しければ、將軍方には、饗庭右衛門藏人、同じき左衛門大夫山井三郎相馬、小太郎木綿、左近將監西河兵庫助章壁六郎以下、頼みきつたる兵ども七百餘人討たれにけり。

三番には宮の御勢、新田の一族、菊池肥後守一手になつて、三千餘騎、敵の中を破つて、蜘蛛手十文字に駆け散ちさんとをめてかゝる。少貳松浦草壁山賀島津澁谷の兵二萬餘騎、左右へさつと分れてさんぶに射る。宮方の勢射立てられて引きける時、宮は三所まで深手を負はせ給ひければ、日野左少辨坊城三位洞院權大納言、花山院四位少將北山三位中將北畠源中納言春日大納言土御門右少辨高辻三位葉室左衛門督に至るまで、宮を落しまゐらせんと、踏み留つて討たれ給ふ。これを見て新田の一族三十三人、その勢千餘騎、横合にかゝつて、兩方の手先を追ひまくり、真中へ會釋もなく、駆け入つて、引つ組んで落ち、打ち違へて死に、命を限りに戦ひけるに、世良田大膳大夫田中彈正大弼岩松相模守桃井右京亮堀口三郎江田丹後守山名播磨守敵に組まれて討たれにけり。

菊池肥後守武光子息肥後二郎は、宮の御手を負はせ給ふのみならず、月卿雲客新田の一族たち、そくばく討たるゝを見て、いつのために惜しむべき命ぞや。日頃の契約違へず、われに伴なふ兵ども、残らず討死せよ。と勵まして、真先に駆け入る。敵、これを見知りたりければ、射て落さんと、鏃を揃へて雨の降る如く射けれども、菊池が着たる鎧は、この合戦のために三人張りの精兵に、草摺を一枚づつ射させて、通らぬ札を一枚ませにこしらへて、緘したれば、いかなる強弓が射けれども、裏かく矢一つもなかりけり。馬は射られて倒るれども、乗り手は傷を被らねば、乗り替へては駆け入り駆け入り、十七度まで駆けけるに、菊池、冑を落されて、小鬘を二太刀切られたり。すはや討たれぬと見えけるが、少貳新左衛門武藤と押し並べて組んで落ち、少貳が首を取つて、鋒に貫ぬき、冑を取つて打ち着

て敵の馬に乗り替へ、敵の中へ破つて入り、今日の卯の刻より酉の  
 下りまで一息をも繼がず相戦ひけるに、新少貳を始めとして、一族  
 二十二人頼みきつたる郎從四百餘人、その外の軍勢三千二百二十  
 六人まで討たれにければ、少貳今はかなはじとや思ひけん、太宰府  
 へ引き退きて、寶萬嶽に引きあがる。菊池も勝軍はしたれども、討  
 死したる人を數ふれば千八百餘人とぞ注したりける。續いて敵  
 にもかゝらず、暫く手負ひを助けてこそまた合戦を致さめとて、肥  
 後國へ引き返す。

五月天心

燕村

月天心貧しき町を通りけり

村百戸菊なき門も見えぬかな

鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分かな

小鳥來る音うれしさよ板びさし

木枯や廣野にどうと吹き起る

蕭條として石に日の入る枯野かな

斧入れて香におどろくや冬木立

宿かさぬ火影や雪の家つゞき

春の水山なき國を流れけり

草霞み水に聲なき日暮かな

大和路の宮も藁屋も燕かな

卯の花のこぼるゝ露の廣葉かな

高紐にかくる兜や風薫る

五月雨や大河を前に家二軒



夕立や草葉をつかむむら雀

## 六 樹氷の世界

一

冬山の朝、稀に一天雲もない紺碧の青空に恵まれることがある。周囲は一面に白銀の世界である。それは清浄と美との世界であつて、汚れたものは一物もない。その世界の中でも、一きはすぐれて美しいものは、青空を背景にして、木々の枝々に眞白に咲いた樹氷の景觀である。それはまさしく冬咲く花である。

樹氷くらゐ、冬山を楽しむ人たちに愛されるものはない。雪滑りの人たちが樹氷の美を説く時、その目は遙かな北の山に對する抑へがたい憧憬と追憶とに満ちてゐる。

樹氷の美は、そのやうに多くの人たちによつて傳へられてゐる。それにも拘はらず、樹氷の物理学はまだほんの緒にいたばかりである。しかも、それは現在の國家情勢のもとでは、緊急に解決を要するたくさんの問題の根源なのである。その一つは、樹氷生成の機構がそのまゝ、航空機に於ける雪の凍結の機構になつてゐることである。

航空機と航法との發達は、いろ／＼な難問を次々と解決して來た。しかし、雪中飛行又は霧中飛行に於ける凍結防止の問題は、殆ど未解決のまゝに殘されてゐるといつてよいであらう。

航空機に於ける雪や霧の凍結といふと、問題は複雑なやうであるが、それは結局風の強い場合に、固體表面に雪や霧が凍り着く現象である。即ち樹氷である。

普通に樹氷といふのは、木の枝又は木全體に、廣い意味での氷が附着したものの總稱である。或る場合には、それはやゝ透明ないはゆる粗氷で、又、或る場合には、霧の小滴が眞白く凍り着いた霧氷である。かの雪山の怪人は、雪片と霧の雫とが混つて凍り着いたもので、その場合、霧の雫が糊のやうな役目をして、雪片を凍り着かせてゐることが多い。

## 二

粗氷の出来る場合に、顯微鏡で霧の粒が附いて行くところを見てゐると、そのやうすがよくわかる。吹きさらはれさうな雪混りの風の中の仕事だけに、顯微鏡だの樹氷の附く木片だのを、十分しつかり固定しておいても、視野が振動してなかく、精密な觀測はできない。それでも根氣よく見てゐると、時々新しく附いた霧の

粒が、ぶる／＼と震へながら急に大きくなるのが見られることがある。嵐の中のことだから、視野は暗く、霧の粒は小さいから、詳しいことはわからない。しかし、薄灰色の霧の粒の周邊が少し光り、それがぶる／＼と震へながら成長して行く姿をのぞいてゐると、何だかそれが小さい一つの生命のやうに見える。

霧粒の成長の姿は、このやうに可憐である。かういふ可憐な霧粒のいたづらが、やがて半透明な粗氷となり、飛行機の翼やプロペラに凍り着いて、ナイフで削り落さうとしても、なかく落ちないやうにならうとは、ちよつと考へられなくらいである。

霧氷の出来るところを顯微鏡で觀察すると、前の場合よりもつとおもしろい。霧氷の伸びる尖端を視野の中に置いて、たくさん並んだ團子をじつと見てゐると、いつの間にか、その一つの上に

小さい團子が附いて、瓢箪のやうな形が出来る。その方に氣がとられてゐるうちに、その隣りにも、ずつと離れた所にも、びよこびよことたくさん瓢箪が出来る。運がよい時には、霧の粒がずつ飛んで来て、凍り着くところが見えることもある。そのうちに、瓢箪の頭に、又次の霧粒が附いて、花見團子が出来る。

前の場合は可憐な生命のやうな氣がしたが、今度の中には手品のやうなおもしろさがある。かういふと、二つの現象は全く別々に起るかのやうであるが、実際には、この二つが時間的に入り混つて起る。それで、霧氷と、普通にいふ氷との間のいろ／＼な中間状態が生じ、實際の現象はなかく複雑になる。

以上のやうな樹氷の成長は、空氣中に十分濕氣がある場合のことであるから、ちよつとでも空氣が乾くと、今まで出来てゐた樹氷が蒸發してやせ始める。一體に樹氷が出来る場合は、氣流の擾亂が激しいことが多く、風は強弱乾濕共に刻々變化する。樹氷はそのたび毎に消長するので、詳しく見れば見るほど生き物になつて来る。

(中谷宇吉郎ノ文ニ據ル)

## 七 たぎりたつた時代の人

一

人の世といふものは、その時代時代で異なつてゐる。自然そのままのやうな時代もあり、悪く小利口な時代もある。人の心のだらけきつた、けちな時代もあり、鋭く強くなつて、たぎりきつた湯のやうな時代もある。微菌のうよづくに適したなまぬるい湯のや

うな時代もあり、冷たくて活氣の乏しい氷のやうな時代もある。

永祿元龜天正の頃は、なまやさしい時代ではなかつた。永祿の前は弘治、弘治の前は天文だが、天文よりもまだ前のことだ。京畿地方は戦亂の巷となり、天下はめちやくちやに亂れてゐた。その混亂と紛糾とを整理しようとしたのが、織田信長であつた。豊臣秀吉であつた。

秀吉は混亂から整理へと急いで、例へば、亂れ垢附いた髪を、齒のあらい丈夫な櫛で、ごし〜と搔いて、整へ揃へて行くやうなことをした人であつた。随つて、多少の毛髪は引き切つても、引き抜いてもかまふものかといふ調子でやりぬいた。ところが、結ぼれた毛髪の一かたまりが、ぐつと櫛の齒にこたへた。それは關八州横領の威に誇つてゐる北條氏であつた。えゝ面倒な奴、引き抜いて

しまへと、天下整理の大旆のもとに、四十五箇國の兵を率ゐて攻め下つたのが、小田原の陣であつたのだ。北條氏のほかに、まだ一かたまりの結ぼれがあつて、具合よく整理の櫛の齒に従つて解ければよし、解けなければ、引き抜かれるか、引きちぎられるかの場合に立つてゐた。伊達政宗がそれであつた。

伊達政宗は、十八歳で家督を相續してから、天正十八年まで六年の間に、大小三十餘戰、次第次第に斬り勝つて、既に西は越後境、東は三春、北は出羽に跨り、南は白河を越えて、下野の那須、上野の館林までも威焰が達し、その城主らが心を寄せるほどになつてゐる。特に、去年蘆名義廣との大會戰に、さすがの義廣を斬り靡けて常陸に逃げ出させ、多年の本懐を達して會津を乗つ取り、生まれたところの米澤城から乗り出して會津に腰を据ゑ、これからいよ〜南に

向かつて馬を進めようといふ勢になつてゐた。部下の諸將が、城を築き壘を設けて、根を深くし、帯を固くしようといふ議を立てたところ、さすがは、後に太閤秀吉をして「くせ者」と評させたほどの政宗だ。「なに、そんなけちなことを」と一笑に附してしまつた。政宗の意中は、「いつまで奥羽の邊鄙に鬱々として蟠居しようや。時を得、機に乗じて、奥州駒の蹄の下に天下を蹂躪してくれよう。」といふのである。これが數へ年で二十四の男兒である。諸老臣の深根固蒂の議をうふんと笑つたところは、政宗も實によい器量だ。りつばな火の玉魂だ。

ところが、この火の玉より今少しく大きい火の玉が、西の方から滾轉して來た。命に従はず、朝を輕んずるといふかどで、關白が節刀を賜はつていよく北條氏を攻めるといふのである。北條氏

以外には政宗があるだけで、その他は碌々の輩、關白殿下の重量が十分に壓倒するに足りてゐたが、とにかく北條氏は八州に手が伸びてゐたので、むざとは壓倒されなかつた。關白がたび／＼上洛を勧めたのに、氏政が「弓矢で來い。」と言つたからたまらない。「待つてゐました。」とばかりに、徳川を海道から、眞田を山道から先鋒とし、前田・上杉、いづれも戦にかけては恐しく強い者らに、武藏・上野・上總・下總・安房諸國の北條領の城々六十餘りを一月の間に揉み潰させ、堂々たる大軍を以つて、小田原へ取り詰めた。

政宗も、秀吉が命令づくで、自分とは別に恨みも何もない北條攻めに參會せよといふのに、おもしろい感情をもたうはずはなかつた。そこで、北條が十二分に上方勢と對抗し得るやうならば、上方勢の手並みのほども知れたものだし、何もあわてて降伏的態度に

出る必要はない。且つ、北條が敵し得ぬにしても、長く堪へ得るやうならば、火事はさほど早くわが廂へ来るものではない。かう考へて、他人づきあひの間柄ではあり、戦亂の世の常であるから、形勢觀望と出かけて、秀吉方の催促にも畏まり候とは言はずにゐた。一つには、關東には關東の國自慢、奥羽には奥羽の國自慢があつたであらうし、又、一つには、何といつても、鼻つばりの強い盛りの二十三、四であるから、噂に聞いた猿面冠者に、一も二もなく降伏の形をとるのをいましくも思つたらう。

しかし、政宗は、氏政のやうな、己を知らずかれを知らぬおぼつちやんではなかつた。少くとも、己を知り、又、かれを知ることには注意をもつてゐた。關白の威勢が大きいからといつて、又、關白の命を受けた三好秀次や、淺野長政や、前田利家や、徳川家康や、その他の有象無象が歸服を勧めて來たからといつて、そんなものは鳥の羽音、蛇の羽音だ。そんなことに動く根性骨ではない。自分が自分で合點するところがあつてから、自分の碁の一石を下さうといふ政宗だ。確かに確かに關白と北條とを見積つてから、どうともきめようといふ料簡だ。向背の決着に遅々としたとて仕方がないのだ。

その政宗が小田原へ赴くべく出發した時は、既に機を失してゐたから、兵を率ゐてではなく、いはば歸服を表示して不參の罪を謝するためといふ形であつた。政宗參候のことが通ぜられると、率直な秀吉もさすがにすぐには對面を許さなかつた。「箱根の底倉に居て、何分の沙汰を待て」といふ命令だ。今更仕方がない、政宗は底倉の温泉のもや／＼した中に、うつたうしい身を埋めてゐるよ

りほかなかつた。やがて、秀吉は政宗を笠懸山の芝の上に引見した。秀吉は政宗に侵略の地を上納することを命じ、米澤三十萬石を舊の如く與へることにし、それで不服なら國へ歸つて何とでもせよ。」とやさしくもあしらひ、強くもあしらつた。

小田原は果して手ごはい手向かひもせず、らちもなく軍氣が沮喪して、遂に開城するの止むを得ざるに至つた。秀吉は何をするのも手早い大將だ、小田原がすむと、直ぐに諸將を従へて奥州へと出かけた。威を示して出羽、奥州一撫でに治めてしまはうといふのである。政宗が服したのであるから、刃向かはうといふ者はない。七月に小田原を潰して、八月にはもう會津に居たのである。

土地の歴史からいへば、會津は蘆名に戻さるべきだが、蘆名は一度もう落去したのである。この樞要の地を、材略武勇の足らぬも

のに託しておくことはできぬ。まして、伊達政宗が連年血を流し、汗をした、らして切り取つた上に據つたところの地で、いや／＼ながら差し出したところであり、又、さなくとも屈強な奥州の地武士が、何をし出さぬとも限らぬところである。又、さういふ心配がなくとも、廣濶な出羽、奥州に信任すべき一雄將をも置かずして、新付の奥羽の大名らの誰にもせよに任せておくことはできぬところである。こゝに於いて、誰かしら、然るべき人物を會津の主將に据ゑて、奥州・出羽の抑への大任、わけても伊達政宗を、表はじつとりと扱ひ、内々はごつつりと手ごはく當てて屏息させるやうな、しつかりした者を必要とするのである。このむづかしい場所の、むづかしい場合の、むづかしい役目を引き受けさせられたのが、鎮守府將軍田原藤太秀郷ひでとの末孫といはれ、江州日野の城主から起つて、今

は勢州松阪に一方の將軍星として光を放つてゐた蒲生忠三郎氏郷であつた。

二

氏郷は、田原藤太十世の孫の俊賢が始めて江州蒲生郡を領して、蒲生と呼ばれた家の賢秀といふ者の子である。

賢秀は佐々木の徒黨であつたが、佐々木義賢が凡物で信長に追ひ落されたので、一旦は信長に對し死を決して敵となつたが、縁者の神戸藏人の言に従つて信長に附いた。神戸藏人は信長の子の三七信孝の養父である。そこで子の鶴千代丸、即ち後年の氏郷は、十三歳で信長のところへやられた。いはば、賢秀に異心なき證據の人質にされたのである。

信長が鶴千代丸を見るに、なか／＼の者だつた。十三歳といへ

ば、今なら中學へはいるかはいらぬかの齡だが、たぎりたつてゐる世の中の兒童だ。そのものごしもの言ひにも、だん／＼と自分を鍛へ上げて行かうといふりつばな心のひらめきが見えたのであらう。信長は賢秀に對して、「鶴千代丸が目つき凡ならず。たゞ者ではあるべからず。信長が婿にせん」と言つたが、やがて鶴千代丸に元服をさせて、信長の彈正忠の忠の字に因み、忠三郎賦秀と名のらせて、眞にその言葉通り婿にしたのである。

鶴千代丸は信長の鑑識に背かなかつた。十四歳の八月のことである。信長が伊勢の國司の北畠と戦つた時、鶴千代丸は初陣をした。蒲生家の覺えの勇士の結解十郎兵衛種村傳左衛門といふ二人にも先んじて、よい敵の首を取つたので、鶴千代丸に附けおかれた二人は、面目ないやら嬉しいやらで舌を卷いた。



かくて氏郷は、もはや人質ではなく、京畿に威を振るふ信長の縁者、小さくはあるが、江州日野の城主の若君として世に立つたのである。これよりして、氏郷は信長に従つて各所の征戦に功を立て、信長の死後は秀吉の旗のもとに就いて、だん／＼と武功を積んだ。

氏郷は法を執ること嚴峻な人で、極端に自分の命令の徹底的ならんことを期した人である。もちろん、亂れたつた世にあつては、一軍の主將として、下知の通りに物事のはこぶのを期するのは至當のわけで、さなくとも軍隊の中に於いては、下々の心任せなどがあつてはならぬものであるが、それでも、おのづから寛嚴の異があり、程度がある。氏郷は恐しく嚴しい方で、小田原北條攻めのために松阪を立つた二月七日の事だ。一人の侍に蒲生重代の銀の鯨なまぐの冑を持たせておいたところ、氏郷自身先陣より後陣まで見廻つ

た時、「こゝに居よ。」と言つた所にその侍が居なかつた。そこで氏郷が「きつとこゝに居よ。」と注意を與へておいて、それから組々を見廻り終へて還つた。よく／＼取り締めた所存のなかつた侍とみえて、またもや言ひつけた所に居なかつた。すると、氏郷はものも言はずに、馬の上で太刀を抜くが否や、その首ちやうと打ち落して、冑を別の男に持たせたので、士卒らはこれを見て、舌を振るつて驚き、一軍肅然としたといふことである。

氏郷は法令嚴峻である代りには、自ら處することも一毫の緩怠もない。徹底して「武人」の面目を保ち、徹底して「武人」の精神を振るつてゐる。いはゆる「たぎりきつた人」である。蒲生家に仕官を望んで、新規に召し抱へられる侍があると、氏郷は「當家の奉公はさして面倒なことはない。唯、戰場といふ時に、銀の鯨の冑を被つて、油

断なく働く武士があるが、その武士に恥ぢぬやうに心掛けて働きさへすればそれでよい。」と言つて教へたといふ。いふまでもなく、銀の鯨の冑を被つて働く者は氏郷なのである。

かくの如き人は、主人としては恐しくもあれば頼もしくもある人で、敵としては、いはゆる手ごはい敵、味方としては堅城鐵壁のやうなものである。しかし、かくの如き人には、やゝもすれば我執の強い、古い言葉で言へば、かたむくろの人が多いものだが、さすがに氏郷は器量が小さくない。さらりとした爽朗快活なところがあつた。

嘗つて九州陣巖石の城攻めの時に、軍令に背いて勘當された臣下の者どもが、氏郷と交情のよかつた細川越中守忠興を頼んで詫び言をして貰つて、また新たに召し抱へられることになつた。その中に西村左馬允といふ者があつて、大の男の大力の上に、相撲は殊更上手の者であつた。その男が勘當を赦されて、新たに召し還されたばかりの次の日の朝出仕すると、「左馬允、汝は大力相撲上手よな。さあ一番来い。おれに勝てるか。」と言つて、氏郷が相撲を挑んだ。氏郷ももとより非力の相撲弱ではなかつたのであらう。左馬允は弱つた。勘當を赦されて歸り新參になつたばかりなので、主人を叩きつけて主人がよい心持のするはずはないから、當惑するのにも無理はない。しかし、主命である。挑まれて相手にならぬわけには行かぬから、「心得ました。」と引つ組んで捻ぢ合つた。勝てば怒られる、わざと負けるのは輕薄でもあり、心外でもあると、惑はぬことはなかつたらうが、そこは人の魂のたぎりたつてゐる時代である。左馬允は思ひきつて大力を出して、とう／＼氏郷を捻ぢ

倒した。

そこで「やあ、左馬允、汝は強い。」と主人に笑つて貰へれば上首尾なのだが、さうは行かなかつた。忠三郎氏郷、うんと緊張した顔つきになつて、「無念である。さあもう一度来い。」と力足を踏んで、まなざし鋭く、再闘を挑んだ。見てゐる者は氣の毒で堪らない。おやおや、左馬允も、負ければ無事だらうが、勝つた段にはもと／＼勘氣を蒙つた奴である、手討になるか知れたものではないと危ぶんだ。左馬允もかうなつては是非がない。こゝで負けては、たとひ過まつて負けたにしても、輕薄者、表裏者になると思つたから、油斷なく一生懸命に捻ぢ合つた。雙方死力を出して争つた末、とう／＼左馬允は氏郷をやつつけた。

その時始めて、氏郷はにつこと笑つて、「ういやつだ。汝はこのおれによつて勝つたぞ。」と褒美して、その翌日知行米加増を出したといふ。最初一度負けるところで、褒詞を與へてすますくらゐのところなら、少し腹の大きい者にはできることだが、二度目の取つ組み合ひをしたところがちよつとおもしろい。氏郷の腹は潤いばかりでなく、奥深いところがあつた。

かういふ性格で、手厳しくもあり、打ち開けたところもあり、さうして、その能は、勇武もあり、機略もあつた人だが、その上に、氏郷は文雅を喜び、趣味の發達した人であつた。机に倚つて靜坐して、書籍に親しんだ人であつた。

足利以來の亂世でも、三好實休や太田道灌や細川幽齋はいふに及ばず、明智光秀も、豊臣秀吉も、武田信玄も、上杉謙信も、稻葉一鐵も、伊達政宗も、皆文學に志を寄せたもので、要するに、文武の兩道に達

するのが良將名將の資格とされてゐた時代の信仰にもよつたらうが、そればかりでもなく、人間の本然の欺き蔽ふべからざるところから、優等な資質を有してゐる者が文雅を好尚するのは、おのづからなることでもあつたらう。

氏郷は早くより茶道を愛して、しかも、利休門下の高足であつた。氏郷と仲のよかつた細川忠興は、「茶庭の路次の植ゑ込みに槇の木などはおもしろいが、まだりつば過ぎる。」と言つたといふほどに侘びの趣味に徹した人だが、氏郷も幽閑清寂の茶旨には十分に徹した人であつた。或る時、古いく油を運ぶ竹筒を見ておもしろいと感じ、それに水仙の花を生け、これも當時風雅を以つて鳴つてゐた古田織部に與へたといふ話が傳はつてゐる。その花生けの形は普通に「舟」といふ竹の釣り花生けに似たものであるが、少し異な

つたところもあるので、今にその形を摸した花生けを「舟」とはいはずに「油さし」とも「油筒」ともいつてゐるのである。

しかも、油筒如き微物を取り上げるほどの細かい人かと思へば、細川越中守がそろりに氏郷所有の「佐々木の鐙」を所望した時には、それが蒲生重代の重器であつたにも拘はらず、又、家臣の「互利八右衛門」といふ者が、「御許諾なされた上は致し方なけれど、御當家重代の物故に、たゞ寫しをこしらへて御遣しなされまし。」と言つたにも拘はらず、「天下に一つの鐙故、他に知る者はあるまいけれど、寫しを遣すなどとはわが心が恥づかしい。」と言つて眞物を與へた。後に、忠興もわが所望したことがそろりであつたことを悟つて、返さうとしたが、氏郷は、「一旦差し上げたものなれば御遠慮には及ばぬ。」と受け取らなかつた。忠興もよい人だから、氏郷の死後に、その子秀

行へとうく返戻したといふことである。

三

かくの如き忠三郎氏郷は、秀吉に見立てられて會津の主人となつた。當時氏郷は何萬石取つてゐたか分明でないが、松阪に居た天正十六年には十六萬石、もしくは十八萬石であつたといふから、その後は大戦もなく、大功も立つわけがないから、大抵十八萬石か少し上ぐらゐであつたらう。しかるに、小田原陣のてがらがあつて後には、大沼河沼稻川、耶摩猪苗代、南山、以上六郡、越後の内で小川の庄、仙道には白河、石川、岩瀬、安積、安達、二本松、以上六郡、都合十二郡一庄で、四十二萬石に封ぜられたのだ。十八萬石ほどから一足飛びに四十二萬石の大封を賜はつたのだから、たとひ大役を引き受けさせられたとはいへ、奥州・出羽の抑へといふ名譽を背負つた上に、

に、めざましい加祿として、家臣連の喜んだことは察するに餘りある。

これは八月十七日の事といはれてゐる。ちやうど仲秋の十六夜の後一日である。秋は早い奥州の會津の城内、氏郷は獨り書院の柱に倚つてものを思つてゐた。天は高く晴れ渡つて、碧落に雲なく、露けき庭の面の木も草もしつとりとして、趣のある夜の靜かさ、蟲の聲々涼しく、水にも石にも月の光が白く流れて、風流に心あるものの幽懷も動くべき、折からの光景だつた。江州日野五千石ばかりから取り上つて、今は日本無雙の大國たる出羽、奥州、藤原秀衡や清原武衡の故地に踏みしかつて、四十二萬石の大祿を領するに至つた氏郷が、唯凝然と黙してゐる。侍坐してゐるのは山崎家勝といふ者だつた。いかに深沈な主人とはいへ、かゝるめでた

き折に當つて、何か考へに沈んでゐるのはどうしたことであらうかと思つて、ひそかに注意した。すると、これは又何事であらうやがて氏郷の目からは、はらくと涙がこぼれた。家勝は直ちに見て取つて怪しんだ。が、忽ちにして思つた、これは感喜の涙であらうと。蟹は甲に似せて穴を掘る。仕方のないもので、九尺梯子は九尺しか届かぬ。自分の料簡がその邊だから、家勝にはその邊だけしか考へられなかつた。しかし、それにしては、どうもやうすが腑に落ちかねたから、恐るゝ進んで、恐れながら、わが君には御落涙遊ばされたと見受け奉つてござるが、秀吉公のとりわけの御懇命、會津四十二萬石の大祿をかづけられ給ひし御感の御涙には、しおはすか。」と聞いてみた。すると、氏郷はちよつと歎息して、「あ、そのやうな事に思はれたか、われ恥づかしい。」と言つた。が、一段と聲

を落して、殆ど獨り言のやうに、「さうではない、山崎。われたとひ微祿小身なりとも、都近くにあらば、何ぞの折にはいかやうなる働きをもなし得て、旗を天下に吹き靡かすこともならうに、大祿を今受けたりと申せ、山川遙かに隔たつて、皇城を霞の日に、出でて、秋の風に袂を吹かるゝ、白河の關の奥なる奥州、出羽の邊鄙に在つては、日頃の本望も遂げんことはかたく、わが槍も太刀も草叢に埋るるばかり、それが無念さのそゞろの涙ぢやわい。今日より後は、奥羽の抑へ、贈太政大臣信長の婿たるこの忠三郎が、よしなき田舎武士どもをも、事と品によつては相手にせねばならぬおもしろからぬ運命に立ち至つたが、忌まはしい。」と胸中の鬱をしめやかに洩らした。無論、家勝もこれを聞いてわかつた。なるほど、わが主人が手を天下に掛けようとしたとて、不思議はない、男たる者の當り前

だと悟るにつけて、かやうな草深い田舎に、身がらといひ、器量といひ、あつばれりつばな主人が埋められかゝつたのを思ふと、悽然然として、家勝も悲壯の感に打たれないわけには行かなかつたらう。主人の感慨、家臣の感慨、肅として秋の氣は座前座後に満ちたが、月は何知らず冷やかに照つてゐた。

氏郷が會津四十二萬石を受けて、喜ばずに落涙したといふのは、何といふ味のある話だらう。世には五十石加増で有頂天になり、百石で感涙に咽ぶ者も多い。それらに比べて氏郷の感慨の涙は、さすがに氏郷の涙だと言ひたい。それだけに生まれついてゐる者は、生まれついてゐるだけの情懷がある。韓信が絳灌樊噲の輩と伍をなすを恥ぢたのは、韓信にとつてはどうすることもできないことなのだ。樊噲だつてりつばな將軍だが、生きて即ち噲らと

伍を爲す。と仕方がなしの苦笑をした韓信の笑ひには涙が催される。氏郷の書院柱に倚りかゝつて月に泣いたこの涙には、片頬の笑ひが催されるではないか。さすがによい男ぶりだ。

(幸田成行ノ文ニ據ル)

## 八 長柄堤

晨鷄再び鳴いて残月薄く、征馬頻りにいなゝいて行人出づ。はや分れ行く横雲や、残んの星を一つづつ、鐘が消し行くしのゝめの、長柄堤に秋闌けて、一むら蘆に風騒ぎ、有明凄き淀川水、往きて歸らぬ浪の音、狭霧に咽び白け行く、千草の陰の蟲の聲、あはれはいとゞまさるらん。片桐市正且元は、居城茨木へ立ち退かんと、従ふ郎等一百餘人、寅の刻に屋敷を立つて、大阪城をあとになし、列を正してしづくと、長柄堤にさしかゝる。その時、市正手綱

を控へ、從兵を先へ進ませ、弟主膳正しゆざんのかみ（片桐貞隆）を近づけ、改めて言ひけるやう。

市正「いかに弟、われ、昨日討手を待ち受け、自殺せんずる覺悟なりしに、備へありと見たがへしか、また寄せ來たらん模様もなく、あまつさへ夜に入りては、外に在りし家の子まで、變を聞きつけ馳せ集り、血氣のともがらこれに氣を得て、弓鐵砲とひしめき騒ぎ、言ひつけを聞かばこそ。打ち棄ておかば、珍事に及ばんも量りがたく、暫くかれらをなだめんため、一先づ茨木へ引き退き、後事を計らんとはいひしものの、昨夜ほのかに傳へ聞けば、織田入道殿信雄も君を見限り、俄かに京表へ退去の由、お家の危機いよゝゝ迫りぬ。今にも關東と隙を生じ、大事に至らんこと必定なり。それに就き所存あつて、先刻今村三右衛門

を、木村（長門守重成）が屋敷へ走らせたり。おつつつけ、これへ吉左右あらん。われはこゝにて相待つべし。御身は暫くわれに代り、手勢を差配し、途中に不慮の間違ひなきやう、一足先へ參らるべし。」

と言葉のうち、遙かに慕ひ驅け來る足音。

主膳「あの足音は、確かに今村。」

市正「三右衛門か。」

今村「わが君、これに御座ありしか。長門様にはおつつつけこれへ。」

市正「大儀大儀。然らば主膳は一足先へ、三右衛門も共に。」

主膳「仰せなれども、唯御一人この所に御座あらんは心もとなし。」

今村「せめてわれゝゝ兩人は。」

市正「はて、いらぬ遠慮。氣づかひ致すな。行け、行け。」



主膳「ちやと申して。」

市正「はて、行けと申すに。」

二人「は、あ。」

顔見合はせて是非なくも、主膳を先に一同は、心残して行き過ぐる。あとには何か一思案、寂然として駒立つる、長柄堤の有明方、見る目も暗きをちかたに、おぼろおぼろと現るゝ、名に大阪の四衢、八街、悄然としてさびしげに、一棟高く聳えしは、

市正「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと、築かせられし大阪城、太閤薨じ給ひて後、まだ程もなきに礎、揺らぎ、諸大名の心は離れぬ。かゝる仕儀となつたること、御運の末といひながら、  
と言ひかけ、こらへず馬よりとび下りて、かなたに向かひ平伏し、

市正「これ、しかしながら、不肖且元、愚昧にして先見なく、姑息因循にして大事を誤り、空しく關東のわなにかゝつて、御遺命にもとり奉る今日の仕合はせ。不忠とも、言ひがひなしとも思し召さん。償ひがたき不臣の罪は、あの世で御詫び仕らん。」

いますぐが如く兩手をつき、人目なければやゝしばし、不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

市正「あゝ、われながら不覺の至り。わが大罪の御詫びよりも、さしかゝるお家の安危、長門守にはいかにせしか。」

透かし眺むる折こそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音、ほどもあらせず、唯一騎、残霧つんざきいつさんに、馳せ來る木村長門守。

長門「市正殿に候な。」

市正「長門殿、待ちかねしぞ。」

言ふ間遅しと驅け寄れば、右手に下り立ち顔見合はせ、言葉はな  
くてそゞろにも、先づ袖濡るゝ朝露や。

長門「もはや豊臣のお家も、いよゝ末となつたるか。棟梁と頼む  
貴殿まで、佞人わいじん、讒者ざんしゃの毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退出せ  
らるゝとは。それがし量らぬ事よりして、はしなくも御嫌疑  
蒙り、出仕を遠慮のその隙に、思ひがけぬ珍變あり。續いて貴  
殿に御討手と昨朝承り大いに驚き、直ちにお表へ參入すれば、  
城内議論沸くが如く、織田入道殿日頃に似げなく、激論の末、席  
蹴立てて唯今退座ありしとばかり。あとは亂脈無法の評定  
大野しゆり修理亮治長すけはる、渡邊わたべ内藏介うちざう糾たづらが我意暴慢。この上は是非に  
及ばず、かれらを一刀に斬つて棄て、腹かき切らんと、二たびま  
で刀の柄に手は掛けしが、貴殿が日頃の教訓を思ひ出して無

念を忍び、無實と知りつゝ、忠臣を救ひ得ざりし言ひがひなさ。」

悔むを且元おしなため、

市正「いしくも堪忍せられしぞや。かねても屢申しし如く、お家の  
大仇はかれらにあらず。鼠輩のために命を落すは、大忠臣の  
所爲にあらず。大切なるはお家の後事。それがし退去の事  
關東に聞えなば、破綻を生ぜんこと治定なるに、昨日までは去  
就を定めざりし織田殿、既に心を變じ、京表へ退身せられしか  
らは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた、大亂起るは  
目前なり。この上は唯偏に籠城の計畫こそ肝要なれ。」

長門「して、籠城の計畫とは、何を以つて先とすべきか。」

市正「されば。今城内に兵糧、金銀は乏しからず、勇將猛卒にも事か  
かねど、得がたきは智謀の將なり。それがしこれを慮り、萬一

の備へをなしおきたり。」

長門「してその智謀の將とは。」

市正「今、九度山くどやまに隠れ忍ぶ、信州上田前かみかたの城主眞田安房守まことが二男、左衛門佐幸村さゆきむらこそ、故太閤の恩を思ふ、智勇兼備の良軍師、先年お味方となしおいたり。事起らば上使を以つて、急ぎかれを招かるべし。合戦の進退は、一切かの人に任せられよ。これ第一の手配りなり。」

長門「して又、籠城となつたる曉敵を防がん手配りは。」

市正「その儀もかねて地利を考へ、出丸なくてはかなふまじと、先年、紀州の山々より材木あまた伐り出させ、御船入りに積みおいたり。又、港口の御藏には、年頃つとめて購なひおきたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に互るといふとも、なほ支ふるに餘

りあるべし。」

長門「それに加へて、故太閤が貯へおかれし數萬の金銀、近年御出費かさむといへども、なほそくばくの餘財あり。」

市正「甲冑、兵具も乏しからず。」

長門「城は名に負ふ南山不落。」

市正「この堅城に立て籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護する時は、」

長門「たとへ關東の老雄、利をくらはせ、諸大名をなづけ、六十餘州の兵を盡くして、四方八面より攻め寄すとも、」

市正「なか／＼三年、四年がほどには、攻め落さんことかたかるべし。」  
長門「又、若年には候へども、いよ／＼軍始りなば、われまた一方を承り、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の吹き翻さん

白旗は、祖先佐々木が四目結、君臣將士心を一にし、千變萬化の手を盡くさば、金石もまた透りぬべし。利慾に集る關東勢、な  
に退くるにかたかるべき。この上は仰せに従ひ、この事君に  
言上なし、直ちに軍の手配りせん。御心安かれ、市正殿。」

市正「ほう、頼もし、頼もし。唯、大事は上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。  
とはいひながら、往時に照らし、成り行く末をかんがみれば、」

長門「社鼠にひとしき大野渡邊。」

市正「上、御發明にわたらせらるれど、」

長門「讒佞これを蔽ふが故、」

市正「地の利はあれども人の和なく、」

長門「故太閤が御威武に、をのゝき震ひ打ち伏しし、六十餘州の民草  
も、」

市正「天の時にや大御所（徳川家康）のおのづからなる徳風に、いつし

か靡く、」

二人「世の有様。」

是非もなしやと、入る方の月眺め入り、しばしは愚痴にをちかた  
寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほのゝくと明けにけり。市正、面を正し、

市正「後事を貴殿に託せし上は、もはや思ひ残す事もなし。」

長門「して、貴殿にはこれよりして。」

市正「居城茨木へ一先づ立ち越え。」

長門「と言はるゝは受け取りがたし。もしもやこれが今生の。」

市正「あゝ、いや、いさぎよき最期をだに遂ぐべき機会を失ひし市正  
が命の拙さ。唯、心ばかりはこの後とても、君の御影に付き添  
ひまゐらせ、大事來たらんその時には。」

長門「それがしとても事破れて、御運の末となる時は、この世の思ひ出、奉公をさめ、關東勢が眞中に、縦横無盡に切つて入り、はなばなしく討死なさん。」

市正「おゝ、勇まし、いさぎよし。それがし長らへ世にあらば、その目ざましき働きをば、よそながら見物せん。なほ再會はあの世にて。まづそれまでは、長門殿。」

長門「さやうござらば、市正殿。」

市正「随分堅固で。」

長門「貴殿にも。」

二人「さらば、さらば。」

と西東、見送る方に霧や立つ、眼や曇る、おぼろおぼろ、いなゝく駒の聲はして、立ち別れ行く面影は、この世の名残りとなり、にけり。

(坪内雄藏ノ作ニ據ル)

### 九 松陰と家庭

妹千代に興ふ

十一月二十七日と日附御座候御手紙並びに九ねぶ蜜柑、鯉節、共に昨晚相届き、圍ひの内はともし暗く候へども、大概相わかり候ま、ま、そもじの心のうちを察しやり、涙が出て止みかね、夜着をかむりて臥せり候へども、いかに堪へかね、また起きて御文繰り返し見候うて、いよゝゝ涙に咽び、遂にそれなりに寢入り候へども、まなく目がさめ、よもすがら寢入り申さず、いろゝゝなる事思ひ出し申し候。わもじは、父母様や兄様のお蔭にて、着物も暖かに、たべ物もゆたかに、あまつさへ筆紙書物まで何一つ不足これなく、寒きにも負

け申さず候間、御安心なさるべく候。そもじの御家をば様もお亡くなりなられ候ことなれば、そもじ萬端心掛け候はでは相すまぬこと、殊にをち様も年増し御齡高くならせられ候こと故、別して御孝養を盡くし候へかし。又萬吉も日々ふとり申すべく候へば、心を用ひて育て候へ。赤穴のばあ様は御まめに候や、御老人の御こと萬事氣を附けて上げ候へ。かゝる御老人は家の重寶と申すものにて、金にも玉にも換へらるゝものにこれなく候。

そもじことは、いとけなき折より心得宜しきものと思ひ、一しほ親しく思ひ候ひしが、このほど御文拜し、いらざる事までも申し進じ候なり。

三日

母瀧より

大にい

ちよつと申しまゐらせ候。そもじ様いかゞお暮しなされ候や。先ほどに不慮の事うすゝ耳に入り、餘り氣づかはしさに申し進じまゐらせ候。昨日よりは御食事お絶ちとか申す事の由、驚き入り候。萬一、それにて御果てなされ候うては、不孝第一、くちをしき次第に存じまゐらせ候。母ことも病多く、弱りをり、長生きもむづかしく、たとへ野山屋敷においで候うても、御無事にさへこれあり候へば、勢になり力になり申し候まゝ、短慮お止め御長らへのほど祈りまゐらせ候。この品わざゝとゝのへ、差し送り候まゝ、母に對しおたべ頼みまゐらせ候。幾重も幾重も御心御ひきかへ、返す返すも祈りまゐらせ候。めでたくかしく。

けふ

母より

大様

父・叔・兄に贈る

平生の學問淺薄にして、至誠天地を感格することでき申さず、非常の變に立ち至り申し候。さぞ御愁傷も遊ばさるべく拜察仕り候。

親思ふころにまさる親ごころけふのおとづれ何と聞くらむ

さりながら、去年十一月六日差し上げおき候書、とくと御覽遊ばされ候はば、さまで御愁傷にも及び申さずと存じ奉り候。なほ又、當五月出立の節、心事一々申し上げおき候ことに就き、今更何も思ひ残り候事御座なく候。このたび漢文にて相認め候諸友に語る書も、御轉覽遊ばさるべく候。

幕府正議はまるに御取り用ひこれなく、夷狄は縦横自在に御府内を跋扈致し候へども、神國未だ地に墜ち申さず、上に聖天子あり、下に忠魂義魄充々致し候へば、天下の事も餘り御力御落しこれなく候やう願ひ奉り候。

隨分御氣分御大切に遊ばされ、御長壽を御保ちなさるべく候。

以上

十月二十日認置

寅二郎百拜

家大人膝下

玉丈人膝下

家大兄座下

兩北堂様隨分御氣體御いとひ專一に存じ奉り候。私誅せられ候とも、首までも葬りくれ候人あれば、未だ天下の人には棄てられ申さずと御一笑願ひ奉り候。兒玉・小田村・久坂の三妹へ五月に申

しおき候事、忘れぬやう御申し聞け頼み奉り候。くれぐれも人をあはれまんよりは、みづから勤むること肝要に御座候。

私首は江戸に葬り、家祭には、私平生用ひ候硯と、去年十一月六日呈上仕り候書とを、神主となされ候やう頼み奉り候。硯は己酉の七月か、赤間關廻浦の節買得せしなり。十年餘著述を助けたる功臣なり。

松陰二十一回猛士とのみ御記し頼み奉り候。

十 高名の木のぼり

徒然草

高名の木のぼり

高名の木のぼりといひしをのこ、人を掬て、高き木にのぼせて梢を伐らせしに、いと危く見えしほどは言ふこともなくて、おる、

時、軒長ばかりになりて、「過ちすな。心しておりよ。」と言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては飛びおるゝともおりなん。いかにかく言ふぞ。」と申し侍りしかば、「そのことに候。目くるめき、枝危きほどは己が恐れ侍れば申さず。過ちは、やすき所になりて必ず仕ることに候。」と言ふ。

あやしき下藎なれども、聖人の誠めになへり。鞠もかたき所を蹴出して後、やすく思へば必ず落つと侍るやらん。

水車

龜山殿の御池に大井川の水をまかせられんとて、大井の土民に仰せて、水車を造らせられけり。多くの錢を賜ひて、數日に營み出してかけたりけるに、大方めぐらざりければ、とかく直しけれども遂に廻らで、徒らに立てりけり。さて、宇治の里人を召してこしら



へさせられければ、安らかに結ひてまゐらせたりけるが、思ふやうにめぐりて、水を汲み入るゝことめでたかりけり。

よろづにその道を知れる者はやんごとなきものなり。

榎の木の僧正

公世の二位のせうとに、良覺僧正と聞えしは、極めて腹悪しき人なりけり。坊の傍らに大きな榎の木のありければ、人、榎の木の僧正とぞ言ひける。この名然るべからずとて、かの木を伐られにけり。その根のありければ、切り杣の僧正と言ひけり。いよく腹立ちて、切り杣を掘り棄てたりければ、その跡大きな堀にてありければ、堀池の僧正とぞ言ひける。

植うるること

・陰陽師有宗入道鎌倉より上りて、尋ねまうで來たりしが、先づさ

し入りて、「この庭の徒らに廣きこと、淺ましくあるべからぬことなり。道を知る者は植うることを努む。細道一つ残して、皆畠に造り給へ。」と諫め侍りき。

まことに、少しの地をも徒らにおかんことは益なきことなり。

食ふ物、藥種などを植ゑおくべし。

兵仗の難

明雲座主、相者に會ひ給ひて、「己もし兵仗の難やある。」と尋ね給ひければ、相人、「まことにその相おはします。」と申す。「いがなる相ぞ。」と尋ね給ひければ、「傷害のおそれおはしますまじき御身にて、假にもかくおぼしよりて尋ね給ふ、これ既にそのあやぶみのきざしなり。」と申しけり。

果して矢に當りて、失せ給ひにけり。

馬乗り

城陸奥守泰盛は雙なき馬乗りなりけり。馬を引き出でさせけるに、足を揃へて、しきみをゆらりと越ゆるを見ては、「これはいさめる馬なり。」とて鞍を置き換へさせけり。又、足を伸べてしきみに蹴當てぬれば、「これはにぶくして過ちあるべし。」とて乗らざりけり。道を知らざらん人、かばかりおそれなんや。

二つの矢

或る人、弓射ることを習ふにも、ろ矢をたばさみて的に向かふ。師の曰く、「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて初めの矢になほざりの心あり。毎度唯得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」と言ふ。僅かに二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと思はんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを

知る。この誠め萬事にわたるべし。

道を學する人、夕べには朝あらんことを思ひ、朝には夕べあらんことを思ひて、重ねてねんごろに修せんことを期す。況んや一刹那のうち、に於いて、懈怠の心あることを知らんや。何ぞ唯今の一念に於いて、直ちにすることの甚だかたき。

十一 道

昔、刀鍛冶が刀を鍛錬する時は、一心不亂であつた。精進潔齋、一切の邪念を棄てて、神明に感通するまで心を籠め、思ひを凝らした。さういふ至誠と集中とがあつて始めて、武士の魂とするにふさはしい名刀が鍛へ出されたのである。しかし、これは獨り刀劍鍛錬の上のみではなく、萬事この境に至らなくては、到底その奥義は極

められない。われ々の祖先は何事にまれ、一事を修めようとす  
るに當つては、實にこの覺悟と決心とを以つて刻苦し、勉勵したの  
である。

これは、古來總べての藝術に、道といふ語が用ひられてゐること  
によつても明らかである。道とは神道、儒道、佛道などの語に於け  
る如く、人々の據るべきところの意で、道徳的な意味が主となつて  
ゐて、單なる術とは違ふ。劍術、弓術、馬術などといへば、單にその技  
術をいふのであるが、その極意、奧義をいふ場合には、必ず劍道とい  
ひ、弓馬の道といふ。昔は、和歌を學ぶ人は、歌道を學べば、直ちに極  
樂往生ができるとまで信じた。それ故、名歌を得られるやうにと  
住吉明神に參籠したことなどは、決して珍しくない。歌道は又、日  
本固有の道であるといふところから、敷島の道、葦原の道などとも

名づけられたのである。その他、書法を書道といひ、茶の湯を茶道  
といひ、更に香のやうな末技までも香道といつた。音楽はもとよ  
り、生け花でも、蹴鞠でも、投扇でも、總べて道として尊んでゐる。

藝術は指の先や手の先で、唯その技術を練習するだけでも、もち  
ろん或る程度までは上達できるが、それは、畢竟、生命のない技術に  
過ぎない。眞の上手になり、奧義を極めるには、心がこれと融合し  
なければならぬ。一心不亂、その藝術に専らにならなければなら  
ぬ。碁を打つ人でも、碁のほかには何も考へないやうにならなけ  
れば、上手にはなれぬといふ。碁などは、もとより一種の遊戯に過  
ぎないから、普通の人が、そのために一切を放擲するのは考へもの  
だが、碁や將棋のやうな遊戯に於いてさへ、専門家になるには、それ  
だけの覺悟がなくてはならないといふのである。言ひ換へてみ

れば、何の業も、總べて精神を打ち込まねばならぬといふのである。しかもその精神たるや、道徳に合して非難するところのないりつばな精神でなくてはならぬ。

凡そ人の趣味・性格は、必ずその動作・技能の端にまで現れるもので、人の筆蹟を見ればその人物がわかるとは、一般にいはれてゐるところである。まして、詩歌などの作品の上に現れるのはもちろん、歩き方や靴の減り方からさへ、人物を見分けることができるといふ人がある。かくの如く、いかなる技藝・藝術にも、その人の性格が現れるものであるから、その技藝・藝術の極致に至らうとするには、上に述べたやうに、一切の邪念を棄てて、精進・潔齋の心でこれに當らなければならぬのは、蓋し當然の事であらう。こゝに至つて、智と徳とは合一する。といつても、智から徳が出るのではなく

て、徳がなければ、眞の智には達せられぬといふのである。この意味からみれば、われらの祖先が小さい藝能までも道と稱し、又その道の師を同時に人間の師として尊んだことが、甚だ意味深いことに思はれる。

かくて教育の本義も、やはり總べてを修行として一貫すること  
でなければならぬ。いはゆる、道が一切の根柢をなすのでなければならぬ。人間としての根柢を鍛へ、性格を錬り磨くことと知識・技能を開発させることとが、二つであつてはならぬ。知識・技能を磨くことによつて人間を向上させることによつて知識・技能を進めて行くのである。専門の學業を修めるにも、その學業を飽くまで自分の道と考へ、一身を捧げて、これに當らなければ到底、その蘊奥うんおくには達し得られないであらう。學者も、藝術家も、皆

それらの學問藝術を尊び、これに仕へる心でなければならぬ。然るにやゝもすればこれを單なる方便と考へ、その結果みづからも頭の人手先の人となるのに甘んじてゐる人々があるが、これは學問藝術の第一義を忘れたもので、學問の人たり、藝術の人たる資格のないものである。

元來修行といふことは並み大抵の事ではない。それで古人は修行には何より勉強が大切であると信じてゐた。今は勉強といふ語が非常に安價に使はれて、一時間ぐらゐ讀書しても、今日は一時間勉強したなどといふ。一時間の讀書が果して勉強といへるであらうか。古人の勉強はさういふやさしいものではなかつた。かれらは學問藝術を道として神聖視したので、その道を得るためには眞に骨身を削るやうな刻苦をしたのである。例へばかの寒

稽古を見よ。人が衣を重ね、褥を厚くして寒さを凌ぐ、嚴冬の朝稽古着一枚で、火の氣もない道場に、平素よりも激しい稽古をする。寒ければ火鉢を入れ、ストーブを焚くといふ勉強ぶりとは、非常に違つたものである。しかし、かく寒中朝早く起きて、劍術を學び、柔術を學んだところで、術そのものが短時日の間に、さうきはだつて上達するといふわけではない。寧ろ、寒苦を忍んで勉めるといふことに、重要な意義が存するのであり、修行の容易ならぬことを悟つて、これに對する覺悟態度を確かにするゆゑんであつた。換言すれば、寒暑に負けず、困苦に打ち克つて、目ざす道一つに集中し、精進しようとする熱心と氣力を鼓舞するところに目的があつたのである。さうして、この熱心と氣力こそあらゆる學問藝術を道として成就させる原動力であつたのである。

われくはわれくの祖先がかくの如く一藝を學ぶにも常に  
 道としてその修行に志し、不惜身命みづかみの覺悟を以つて、志業しごふの大成を  
 期したことを、新たに考へてみなければならぬ。

(芳賀矢一ノ文ニ據ル)

教科書番號 11ノ四

昭和十九年九月六日印刷  
 昭和十九年九月十日發行  
 昭和十九年九月三十日翻刻發行

中等國文四

定價金三十六錢

著作權所有

著作  
 者兼  
 發行  
 者

文 部 省

翻  
 行  
 者

東京都神田區岩本町三番地  
 中等學校教科書株式會社

印  
 刷  
 者

代表者 山本慶治  
 東京都牛込區市谷加賀町一丁目十二番地  
 大日本印刷株式會社  
 代表者 佐久間長吉郎

昭和十九年九月十一日  
 文部省檢査濟



發行所

中等學校教科書株式會社



